

学校研究だより

第4号

平成31年2月25日(月)

学校研究委員会



道徳シンポジウムを終えて

1月25日に、道徳の研究授業及び道徳シンポジウムが行われました。

シンポジウムではパネリストとして淑徳大学名誉教授の新宮弘識先生、浜小学校長の岡田真子先生、PTA会長の泉さんを迎え、意見を交わしていただきました。

道徳についての校内研修会を行いました。前半では、新宮先生に模擬授業と講話をしていただきました。その後に質疑応答の時間を設定しました。これからの道徳の授業のあり方がより鮮明になりました。

後半は、小学校の先生方と評価のあり方について、情報交換を行いました。小学校の先生方も模索中の部分もありながら、一人ひとりの子どもをよく見取り、評価につなげる工夫をされていました。来年度からは、中学校でも実際に評価を行います。生徒にも保護者にもわかりやすい評価を目指したいと考えます。

<新宮先生の模擬授業から>

◇ねらい(分析的表現)

- ①友だちが悲しんだり困っていたりしていたら、友だちのことを考えて自分にできることを精一杯しようと思うだけでなく、それを実行する人が、本当の友だちであることが分かる。(道徳的理解)
- ②そのような心を持って実行している人は素晴らしいを感じることができる。(道徳的価値)
- ③そのような人になろうという目標を持って生活しようとする。(道徳的実践態度・態度)

◇教材:「ミレーとルソー」

◇授業の展開

- ①「友」を使った二字熟語をつくり、「親友」とはどのような友だちかについて考える。

→「友人」「親友」「戦友」「悪友」など

→親友について、下記のような辞典の解釈を紹介

- ・小さいときに行動を共にした友だち関係(竹馬の友)を親友という。
- ・大きくなったら、何でも話せる関係を親友という。

→新しい親友関係を見つけようという問を意識する。

- ②中心発問:「ルソーはなぜ、嘘をついてまでミレーの絵を買ったと思うか」

→多様な考えを出させる。

「より高く売れるかもしれない」「飾って楽しみたい」「真似したい」→「認める心」

「ミレーのプライドを傷つけずに助けたい」「世に出してあげたい」→「忍びざるの心」など

それぞれの生徒の意見を道徳的に類別し、「価値づけてあげる」ことが大切!
発言してよかった、と生徒が安心できる。



生徒たちが考えた
い、他の考えも聞き
たいという問題意識
を喚起する工夫を!

- ③親友に関して、「負けたときに訪ねてくるのが、本当の友だちだ」というデッドマル・クラマー（日本サッカーの父）の言葉を教師から聞く。
- ④自分が欲しいと思う友だちをつくるには、自分はどうしたらよいか考える。

<新宮先生の講話（質疑応答）から>



①教材の選び方 ※以下のようなものがよいと教えていただきました。

- ・教師自身がよいと思える、その教材に惚れるもの。
- ・道徳は「性善説」の考えであるので、子どもの可能性をふまえ、人間のよさに向かうもの。
- ・うわべだけの「行為」でなく、その裏の「心」が書いてある、見える、子どもと語れるもの。

②授業づくり

- ・内容項目をよく確認し、理解を深めておく必要がある。時には、いくつかの項目を関連させることもある。
- ・生徒同士の話し合いだけでは深まらないこともある。「友から学ぶ」、「教師から学ぶ」、「教材から学ぶ」活動をバランスよく取り入れるのがよい。
- ・終末では、学んだことをまとめる、これからどうしていくかを書く場の設定は必要である。

<評価のあり方について～小学校の先生方との情報交換～>

実際にどのように評価しているかを中心に、情報交換をしました。まとめてみました。

- ・毎回のワークシートに学んだことを書かせ、ストックしておく。
- ・「道徳ノート」を活用すれば、学びの積み重ねが1冊にまとまる。
- ・生徒にも保護者にもわかりやすくするには、具体的な場面や1つの授業の活動の様子も紹介しながら所見を書くといい。



<みなさんの振り返りから>

◇小学校の先生方より

- ・「友」という漢字で熟語を作るところから、「面白そうだ」「次は何を学ぶのかな」など、興味関心が湧き、主体的な学びにつながっていると思いました。これも、児童・生徒が思考しているからこそ、次の活動に意欲的になっているのだを思います。
- ・「子どもの意見をただ取り上げるだけでなく、教師がその道徳的意味を掘り起し、考えを分類してあげること」。普段このことをあまり意識せず、子どもの意見に質問やツッコミを入れていました。なぜこうするのかという意味が、自分の心の中にストンと落ちたのでよかったです。

◇根上中学校の先生方より

- ・学びが主体的で対話的になるためには、多様な意見を比較させ、違いに気づかせ、道徳的意味を持たせる、はっきりさせる教師の力量が求められていると感じた。
- ・きれいな言葉や、きれいにまとまる内容を求め、取り上げるのではなく、子どもの考えをそのまま、そして一人人としての自分自身の考えを交流していけたら、と思いました。
- ・『行為ではなく、その行為を発生させた「心」が大切で、その心が人間のよさに向かっているかどうか大切である』という話が心に残った。これから授業をするときには、その視点を忘れずに授業づくりをしていきたいと思う。

- 「子どもの発言に道徳的意味を持たせる」という点が一番印象に残りました。子どもの発言を黒板にただ書くのではなく、その価値について考えることができるようにすることが大切だとわかりました。